

村上春樹『海辺のカフカ』における〈暴力〉の連鎖

—— フランツ・カフカ『流刑地にて』、アイヒマンのユダヤ人
大量虐殺、田村カフカに父が与えた傷を手掛かりとして ——

大岡 愛梨沙

一 はじめに

村上春樹『海辺のカフカ』^(注1)は、二〇〇二年九月に新潮社より発行された、村上春樹の一〇作目の長編小説であるが、本作では、カフカ少年がフランツ・カフカの『流刑地にて』や、アイヒマンによっておこなわれたユダヤ人大量虐殺について記された書籍に注目している箇所が見られる。そして、カフカ少年がそれらの書籍の内容に思いを巡らせている際に、人間が他者によって傷つけられることを思い起こしていると考えられる。そのため本論では、カフカ少年がフランツ・カフカの『流刑地にて』とアイヒマンのユダヤ人大量虐殺について話している箇所に注目して、本作に描かれている〈暴力〉の在り方を明確にすることを目的とする。またカフカ少年は、その〈暴力〉の

被害者の側面と加害者の側面のどちらも併せ持っている可能性があるため、最初にカフカ少年にとつての〈暴力〉を明らかにし、最終的に本作における〈暴力〉とはどのようなように循環する性質を持っているのかについて分析することを目的とする。

本作における〈暴力〉について、小森陽一氏はカフカ少年がさくらに対して行った性的な行為にカフカ少年の暴力性があらわれている^(注2)、そこには戦中の慰安婦問題が象徴されると述べている。遠藤伸治氏はカフカ少年が父から受けた「父親を殺し」、「母親と交わる」という予言によって、父から母と姉への復讐を遂行することがこの作品の暴力であるとしている^(注3)。松田和夫氏は村上春樹とフランツ・カフカの関係を注目し、本作が「デタツチメントの作家でありつづけたフランツ・カフカ」の作風と大きく乖離していると述べている^(注4)、本作におけ

る暴力についての考察には至っていない。また松田和夫氏は、フランツ・カフカの『流刑地にて』と本作の比較によって、父からの予言や日々の学校生活といった、カフカ少年を苦しめるものが本作で描かれる暴力だと述べている^(注5)。しかし、論者は、『海辺のカフカ』における〈暴力〉とは、そうした何者かによって一方的に行われる行為ではないことを明らかにしたい。考察にあたって、本文及び引用文献における傍線は論者によるものとし、傍点は原文によるものとする。

二 『流刑地にて』における「処刑機械」について

本節では、作中に登場するフランツ・カフカの『流刑地にて』に注目する。カフカ少年と大島さんの会話を引用する。

「もちろん君はフランツ・カフカの作品をいくつか読んだことはあるんだらうね?」

僕はうなずく。「『城』と『審判』と『変身』と、それから不思議な処刑機械の出でくる話」

「『流刑地にて』」と大島さんは言う。「僕の好きな話だ。

世界にはたくさん作家がいるけれど、カフカ以外の誰にもあんな話は書けない」

「僕も短編の中ではあの話がいちばん好きです」

(第7章九七頁)

カフカ少年がフランツ・カフカの『流刑地にて』の名前を挙げて、「短編の中ではあの話がいちばん好き」だと語っている。

「『城』と『審判』と『変身』と、フランツ・カフカの代表作の名前を挙げた上で、『流刑地にて』が「いちばん好き」であると述べており、カフカ少年の興味関心が向いていることから、『流刑地にて』は注目すべき作品だと考えられる。

カフカ少年は、引き続き『流刑地にて』に登場する「処刑機械」について語る。その箇所を引用する。

「カフカは僕らの置かれている状況について説明しようとするよりは、むしろその複雑な機械のことを純粋に機械的に説明しようとする。つまり……、僕はまたひとしきり考える。「つまり、そうすることによって彼は、僕らの置かれている状況を誰よりもありありと説明することができ。状況について語るんじゃない、むしろ機械の細部について語ることで」

(第7章九八頁)

カフカ少年は、作者であるフランツ・カフカが淡々と「処刑機械」の構造を描くことで、より鮮明に「僕らの置かれている状況」を説明しようとしたのではないかと述べている。そして

このカフカ少年の意見に、大島さんも、「うん、フランツ・カフカもおそらく君の意見に賛成するんじゃないかな」（同頁）と賛同している。

『流刑地にて』という作品における「処刑機械」は、そのしくみについて淡々と記されるだけである。『流刑地にて』からの引用である（注6）。

「つまり、いまごろになつたとおりです。《まぐわ》が書きはじめる。囚人の背中に最初の文字を刻みおわると、綿つきの《ベッド》が動いて囚人を横向きにする。すると《まぐわ》が、そこにまた文字を刻む。では刻み混まれた傷口はどうなるのか。綿には特殊加工がほどこされておりましたね、ギユツとおさえつける即座に血がとまるのです。血がとまるのです。血がとまれば、その上からさらにまた文字を刻みこめるといふものでして、ほら、ここです、《まぐわ》のふちをごらんください。ギザギザがついておりますね、囚人のからだを反転させる際、これでもって傷口に貼りついた綿をとり除き、穴の中へ落とすのです。だから《まぐわ》はすみやかに動きつづけるわけです、そのようにして十二時間のあいだ、だんだん深々と抉りこんで文字を刻みつけるのです。はじめの六時間は、囚人は痛がっ

てはおりますが、とにかくまだしつかりしています。それから二時間したら口のフェルトをとり去ります。そのころにはもうわめく力もないのです。（後略）」（六九・七〇頁）

『流刑地にて』に登場する「処刑機械」は、罪を犯した囚人の背中に、「《まぐわ》」を使って犯した罪の名前を刻みつけるというしくみになっている。囚人は、文字が刻まれている間は自身の罪の名前を知ることができず、最後まで刻みつけられたときに自身の犯した罪の名前が分かるが、その時には囚人は死に至っているのである。そのため、生きている間に自身の罪に気づいて償うことが不可能であり、「処刑機械」によって一方的に裁きが行われている状態であるといえる。人間である囚人の意思は無視され、機械的に処理され死んでいくことから、『流刑地にて』における「処刑機械」とは、人間に常に一方的に攻撃をおこなう存在がいることを象徴していると考えられる。カフカ少年にとって、そうした『流刑地にて』は、「処刑機械」が大量の人間を殺していく状況が描かれていることで、人間が常に理不尽な攻撃を受ける環境の中で生きていることの象徴なのだと推測される。

三 アイヒマンと「処刑機械」について

前節で、フランツ・カフカの『流刑地にて』に登場する「処刑機械」が、本作における一方的な（暴力）をおこなう存在の象徴であることを考察した。「処刑機械」は人格を持たない存在であるが、一つの人格を持った上で他者を一方的に攻撃する人物として、ユダヤ人大量虐殺にかかわったアドルフ・アイヒマンの名前が挙げられる。カフカ少年は、アドルフ・アイヒマンについて記された著作を手に取り読む。その場面を引用する。

僕はそこからアドルフ・アイヒマンの裁判について書かれた本を選ぶ。（中略）

彼は戦争が始まって間もなく、ナチの幹部たちからユダヤ人の最終処理——要するに大量殺戮——という課題を与えられ、それをどのようにおこなえばいいかを具体的に検討する。そしてプランをつくる。そのおこないが正しいか正しくないかという疑問は、彼の意識にはほとんど浮かばない。彼の頭にあるのは、短期間にどれだけローコストでユダヤ人を処理できるかということだけだ。

（第15章二二六頁）

この場面で、アイヒマンがユダヤ人を虐殺することは「処

理」という単語で表現されており、機械的な作業として描かれていることが分かる。ここでのアイヒマンは、人間が人間を傷つけ殺めることに対して、業務の一つとしてのみしか認識できなく、他者の痛みを認識できない人物として登場していると考えられる。アイヒマンが大量のユダヤ人を殺すことについて記す際、「処理」（第15章二二七頁）という単語で繰り返し表現されている。人間が他者の痛みを理解せず、傷つけることに対して罪悪感を持たないことの危険性が、反復される「処理」という言葉に表れていると推察される。

ユダヤ人大量虐殺の首謀者であるアイヒマンは、ユダヤ人に強い憎悪の感情を持っていたことでこのような殺戮をおこなうことができたのだろうか。アイヒマンに直接尋問をおこなったイスラエル警察のレス大尉による記録には、次のように記されている。^(注7)

一九六二年五月三十一日の深夜、アドルフ・アイヒマンはユダヤ人虐殺と人道に対する罪によって絞首刑に処せられた。彼の遺体は焼かれ、その灰は廃棄された。あとに残ったものは、彼の犯した罪だけであり、それは永遠に記憶されるべきものとして存在する。彼がイスラエル警察のレス大尉に語った内容は、これまでのどの絶滅機構についての

記録にもまして、重要な証言を含んでいる。そこには、人間の隠された新しい次元が驚くべき形で顕わにされている。

アイヒマンはアウシュヴィッツとマイダネク強制収容所を視察した結果、そこでの抹殺工程を考え出した人物でもあった。ただし、彼は他人が苦しむのを見て快楽を覚えるサディストではなかった。アイヒマンはほとんど事務所の中で自らの仕事に専念し、結果として数百万の人間を死に追いやったのである。一官僚として、彼は死に追いやられる人間の苦痛に対し、何の感情も想像力も有してはいなかった。彼の尋問に当たったイスラエル警官のレスから、自分の父親もまた大量殺戮の犠牲者の一人だったことを聞いて、アイヒマンは「驚愕」する。しかし、そのことに對しても、彼は部分的な責任しか認めようとはしなかった。彼自身は、レスの父親を含む数百万の人間の死に直接関与したわけではなく、単に移送したに過ぎない、それも命令によつて。彼は再三にわたつて、自分の責任と権限が強制収容所の入口の手前だけに限られていたことを主張した。強制労働も殺人も遺体の焼却も、彼の権限外であった。このことから、アイヒマンは「他人が苦しむのを見て快楽を

覚えるサディストではな」かったが、彼の官僚としての熱心な取り組みの結果として大量虐殺を起こしたことが分かる。アイヒマンがユダヤ人たちに振るつた「暴力」とは、「人間の苦痛に對し、何の感情も想像力も有していない」という、自身の行いに對して想像力を働かせることのない無責任さによつて引き起こされたと考えられる。レス大尉は、このようなアイヒマンの犯した無自覚の「暴力」を「人間の隠された新しい次元」であると語っている。このことから、従来は他者を攻撃し、物理的に傷つけることが「暴力」として認識されていたが、アイヒマンによつて、他者の痛みに鈍感であるという無自覚さそのものが、「暴力」の根源として認識されたと考察される。

また、ハンナ・アーレント氏は、アイヒマンについて次のように述べている（注8）。

アイヒマンという人物の厄介なところはまさに、実に多くの人々が彼に似ていたし、しかもその多くの者が倒錯してもいずサディストでもなく、恐ろしいほどノーマルだったし、今でもノーマルであるということなのだ。われわれの法制度とわれわれの道徳的判断基準から見れば、この正常性はすべての残虐行為を一緒にしたよりもわれわれをはるかに慄然とさせる。なぜならそれは——ニュルンベルク

裁判でくり返しくり返し被告や弁護人が言ったように――
 一、事実上 *hostis generis humani* (人類の敵) であるこの新しい型の犯罪者は、自分が悪いことをしていると知る、もしくは感じることをほとんど不可能とするような状況のもとで、その罪を犯していることを意味しているからだ。

ハンナ・アーレント氏はアイヒマンについて、「実に多くの人々が彼に似て」おり、それらの人々が「倒錯してもいずサディストでもな」い上、「恐ろしいほどノーマルだったし、今でもノーマルである」と述べている。アイヒマンは、与えられた役割を遂行することに集中しただけの真面目な人物ともいえるため、アーレント氏のいう「ノーマル」な存在とも言えるだろう。アイヒマンは第二次世界大戦という異常な状況の中で、自分の思考力を働かせて善悪を判断することを放棄してしまった人物であり、アイヒマンの犯した「罪」はアイヒマンひとりの問題ではなく、アーレント氏が「多くの人々が彼に似て」というように、全ての人間が犯す可能性のある「罪」だといえると考えられる。アイヒマンは他者の痛みに対する想像力の欠如によって、他者に無自覚で(暴力)を振るってしまっただけであるが、この「想像力」について、本作では大島さんが次

のように述べている。

「すべては想像力の問題なのだ。僕らの責任は想像力の
 中から始まる。イエーツが書いている。In dreams begin
 the responsibilities――まさにそのとおり。逆に言えば、
 想像力のないところに責任は生じないのかもしれない。こ
 のアイヒマンの例に見られるように」(第15章二二七頁)

想像とは、「おもいやること。実際には経験のない事物、現象などを頭の中におもい描くこと」(注9)であり、想像力とは、「想像する能力。想像する心のはたらき」(注10)である。この場面における「想像力」とは、他者に対しておもいやりの感情を持って、自分の意思を働かせることである。責任とは、「責めを負ってなさなければならぬ任務。引き受けてしなければならない義務」(注11)である。この場面における「責任」とは、「想像力」によって自分が判断しておこなったことに対して負うものであり、責任を持てる存在が個人の人格がある人間だといえる。

このことから、アイヒマンは「想像力」が無いが故に他者を傷つけ、そのことに罪悪感を持っていないため、「責任」を取ることができない存在として本作で描かれているといえる。「流刑地にて」における「処刑機械」は、感情のない機械であるた

め、大量の人間を傷つけてもそこに責任が生じない。アイヒマンも同様に他者の痛みを想像せずに、機械的に人を殺していったため、『流刑地にて』の「処刑機械」的な要素を持つているといえる。このことから、第一節の『流刑地にて』に関する考察で登場した「処刑機械」とは、人間に置き換えることが可能であると考えられる。そして、「処刑機械」に置き換えられる人間とは、想像力がないことで他者の痛み鈍感で無自覚的に〈暴力〉をふるってしまい、その〈暴力〉に対する償いができない人間を指していると指摘できるのである。

四 田村カフカの父、田村浩一と「処刑機械」について

これまでの節で、『流刑地にて』に登場する「処刑機械」による一方的な〈暴力〉のあり方と、その〈暴力〉が人間によって行使されるということがアイヒマンに象徴されていることを分析した。本節では、「処刑機械」的な〈暴力〉を踏まえた上で、カフカ少年の父親による〈暴力〉について考察する。

カフカ少年が自身の周りに、『流刑地にて』に登場する「処刑機械」が「実際に存在した」と述べている。その箇所を示す。

でも僕がほんとうに言いたかったことは伝わらなかったはずだ。僕はそれをカフカの小説についての一般論として言ったわけではない。僕はとても具体的なものとについて、具体的に述べただけなのだ。その複雑で目的のしれない処刑機械は、現実の僕のまわりに実際に存在したのだ。それは比喻とか寓話とかじゃない。(第7章九八頁)

ここで言われる「処刑機械」とは、少年のことを無自覚であれ傷つけようとする父のことだと考えられる。カフカ少年は、「実際に存在した」「処刑機械」として父を認識していることから、父が自分を傷つけたその痛みは、かたちに残って消えない傷となっていると推測される。そのため、カフカ少年にとつての父は、自身のことを一方的に傷つける機械のような人間味を欠いた存在として認識されていると考えられる。

次に、カフカ少年が父親から受けた「呪い」について話している箇所を引用する。

僕は言う。「予言というよりは、呪いに近いのかもしれないな。父は何度も何度も、それを繰り返しかえし僕に聞かせた。まるで僕の意識に鑿でその一字一字を刻みこむみたい
にね」(第21章三四七頁)

この場面から、カフカ少年は父によって「呪い」の言葉を受

けたと感じていることが分かる。その内容は父を殺し、母と姉を犯すという内容であった。そして、その「呪い」の言葉は、少年の「意識に鑿でその一字一字を刻みこむみたい」に刻まれ、残っていると記される。「鑿」で「刻みこむ」という表現は、『流刑地にて』に登場する「処刑機械」を連想させるため、「現実の僕のまわりに実際に存在した」「複雑で目的のしれない処刑機械」が父田村浩一を指しているといえる。この場面について、松田氏も、

カフカ少年のまわりに「実際に存在した」「処刑機械」は、一義的には彼にオイディプスの呪いかけた（原文ママ）父田村浩一である。むろんときにカッとしてヒューズが飛んだみたいにわれを忘れてしまうようにさせる、友人ひとりいない学生生活も「処刑機械」のひとつと考えられるが、やはりもつとも「処刑機械」的であるのは父親であろう。

と、同様の指摘をしている（注12）。

また、この場面以降もカフカ少年は、「お前はいつかその手で父親を殺し、いつか母親と交わることになる」（第21章三四八頁）、「僕は父を殺し、母と姉と交わる」（同頁）、と何度も父に言われた「呪い」の言葉を反復しているため、父の言葉はカフカ少年の心に大きな傷を与えていることが理解される。

『流刑地にて』の「処刑機械」は、鑿で人間の身体にその罪を刻みつけ、最後まで刻まれると死刑が執行される仕組みになっている。しかし、カフカ少年は『流刑地にて』に登場する囚人ではなく、罪名が付くような罪を犯した人物ではない。そのため、父の「呪い」の言葉には罪状を刻むという意味は含まれておらず、「処刑機械」が人間を一方的に攻撃した行為と同じ意味が込められていると考えられる。したがって、カフカ少年が父から受けた「呪い」の言葉には、罪を刻むという意味はないため、「処刑機械」が罪状を刻み終わると囚人は死に至るが、カフカ少年は父から「呪い」の言葉を何度も刻まれても、傷は残るが、『流刑地にて』に描かれているような現実的な死に直結するということはないといえる。しかし、その傷が癒えないままだと精神的には死に向かう危険性があると考えられる。このことから、父がカフカ少年におこなった「呪い」の発言は、「処刑機械」的に無自覚に他者を傷つけている行為と同一であり、それはアイヒマンがユダヤ人を無自覚的に大量殺戮する行為とも一致すると考えられる。

次に、カフカ少年が父から「作品」として扱われたことの苦しみについて語る場面を示す。

「あるいは父は、自分を捨てて出ていった母と姉に復讐を

したかったのかもしれない。彼女たちを罰したかったのかもしれない。僕という存在を通して」

「たとえそうすることによって、君が損なわれてしまったとしても」

僕はうなずく。「僕は父にとつたぶんひとつの作品のようなものに過ぎないんだ。彫刻と同じだよ。たとえ壊しても損なっても、それは父の自由なんだ」

(第21章三四九頁)

父にとつてカフカ少年がひとつの「作品」であるのだから、カフカ少年自身が認識していることから、父から対等な存在として扱われないことに対する苦しみがあることが窺える。

カフカ少年の父は有名な彫刻家であり、良い作品を作り上げるために物質を削り出す行為を日々行っている。この、意思の無い素材に金属を打ち込んで削り取っていく行為は、作品を制作するためには何の問題も無いが、同じことを意思のあるカフカ少年におこなった場合、カフカ少年の意思を尊重していないことになってしまい、『流刑地にて』に登場する「処刑機械」が囚人を一方的な暴力によって殺す行為と同じことをしているといえらるると推測される。

カフカ少年は、父から「作品」として扱われ、一方的に〈暴

力〉を振るわれた過去がどのような状況だったのかについて次のように話す。

「ねえ、大島さん、僕の育った場所ではすべてのものが歪んでいた。なにもかもがひどく歪んでいたせいで、まっすぐなものが逆に歪んで見えるほどだった。ずっと前からそのことはわかっていて。でも僕は子どもだったし、そこ以外にいる場所がなかったんだ」(中略)

「わかると思う」と大島さんは言う。「そのなかはおそらく、善とか悪とかという峻別を超えたものなんだろう。力の源泉と言えはいいのかもしれない」

(第21章三四九頁～三五〇頁)

この場面のカフカ少年の発言から、少年が「歪」みのある空間で生きてきたことに苦しんでいたことが分かる。カフカ少年の言う「歪」みとは、母親の不在と父親からの「呪い」という言葉の〈暴力〉によって家族が崩壊し、幼い自身が両親の愛情によって守られていない環境で孤独な精神状態であり続けたことを指していると考えられる。しかし自身が幼かったため、そのような「歪」みによって発生した孤独からの逃げ場がなかったと推測される。カフカ少年は父のことを、自身を傷つける加害者として認識しているが、大島さんは、カフカ少年の父のこ

とを「善とか悪とかという峻別を超えた」価値観によって動いている存在だと述べる。

このことから、父は、カフカ少年を傷つけていることは事実だが、カフカ少年に悪意を持って攻撃しているわけでもなく、だからといって傷を与えている自覚もない、無自覚の〈暴力〉を振るう存在であると考えられる。

五 カフカ少年と「処刑機械」について

これまで、第二節で『流刑地にて』における「処刑機械」が、他者を一方的に攻撃する〈暴力〉性を持っていることを明らかにし、第三節ではその「処刑機械」的な〈暴力〉はアイヒマンを例に挙げることによって人間に置き換えても行われることが可能であることを分析した。そして、その〈暴力〉は、カフカ少年の場合は父親から「呪い」の予言として刻みつけられており、カフカ少年が「処刑機械」的な〈暴力〉によって被害を受け苦しんでいることが考察された。

第四節の考察まででは、カフカ少年は一方的に〈暴力〉を受ける被害者のように見受けられる。しかし、カフカ少年は本当に被害的な要素しか持っていないと言い切れるのだろうか。

本節では、第二節から第四節を踏まえた上で、カフカ少年と「処刑機械」的な〈暴力〉の関係性について分析する。

まず、カフカ少年の名前に注目する。カフカ少年は、大島さんに自己紹介をする際、「田村カフカ」と名乗る。大島さんに「不思議な名前だ」と言われると、「でもそれが名前なんです」（第7章九七頁）と「主張」（同頁）する。このことから、カフカ少年が意図的に偽名を使い、他者に自分が「カフカ」であると認識させようとしていることが分かる。これは、少年の心情がフ란ツ・カフカの作品群とリンクするという意味が込められていると考えられる。第二節でフ란ツ・カフカの『流刑地にて』に登場する「処刑機械」について考察したことから、カフカ少年の名前は『流刑地にて』と関わりが深いと考えられる。そのため、「カフカ」という名前には「処刑機械」によって一方的に攻撃を受ける被害的な側面もある一方で、「処刑機械」として無自覚で他者を攻撃してしまう加害者の側面も象徴されていると推測される。

次に、カフカ少年が父親から受け継いだ遺伝子について語ることに注目したい。カフカ少年が家出を決意し、出ていこうとしている場面を示す。

どれだけ強く望んでも、父親から受け継いだとしか思え

ない二本の濃い長い眉と、そのあいだに寄った深いしわをひきむしってしまうことはできない。そうしようと思えば父親を殺すことはできる（現在の僕の力をもってすれば決してむずかしいことじゃない）。母親を記憶から抹殺することもできる。でも僕の中にある彼らの遺伝子を追い払うことはできない。もしそれを追い払いたければ、僕自身を僕の中から追放するしかない。

そしてそこには予言がある。それは装置として僕の中に埋めこまれている。

（第1章一七頁）

カフカ少年は、自身にかけられた「呪い」の「予言」と、自身に流れている両親の遺伝子について思いを巡らせている。カフカ少年はこの二つを自分から切り離すことのできない忌むべきものとして認識していると考えられる。カフカ少年は、父については「父親から受け継いだ」カフカ少年自身の外見的特徴について指摘し、母親については「記憶」として母の存在を指摘している。このことから、母親に対しては、母を失った苦しみがあるが、母親から譲り受けた遺伝子については憎しみの感情を持っていないと考えられる。そのため、カフカ少年にとっ

て自分から切り離したい遺伝子とは、父親から譲り受けた遺伝子だと推測される。カフカ少年は、父から受けた「呪い」について「それは装置として僕の中に埋めこまれている」と述べているが、「装置」という表現は、自分では止めることのできない機械を連想させる。カフカ少年が受けた「呪い」は、父を殺し、母と姉と交わるという内容であるため、父を殺害するという〈暴力〉と、母・姉に対して相手の意思に関係なく性的関係を強いるという〈暴力〉を働かなければならないという意味が込められていると考えられる。そのため、父からの〈暴力〉の被害者であるはずのカフカ少年は、父によって「呪い」の予言をされることで自身の中に〈暴力〉の「装置」を埋めこまれてしまい、今後加害者として他者に〈暴力〉を振るう可能性が示唆されたのだと考察される。

カフカ少年は、自身にかけられた「呪い」の「予言」について、「どんなに手を尽くしてもその運命から逃れることはできない」、「その予言は時限装置みたいに僕の遺伝子の中に埋めこまれていて、なにをしようとしてそれを変更することはできない」（第21章三四八頁）と発言する。「呪い」が「遺伝子の中に埋めこまれて」いるという表現から、カフカ少年は、〈暴力〉性を持った父親から、他者を傷つける内容の「呪い」を受けるこ

とで、自身の内面にも〈暴力〉性が潜んでいることを自覚していると考えられる。

また、カフカ少年は父親について話した後、「僕はその遺子を半分受け継いでいる」（第21章三五〇頁）と述べている。カフカ少年は、父の遺伝子と母の遺伝子によって自分が生まれており、自身を構成する遺伝子の半分は父親によるものであることを自覚する。

この場面までは、カフカ少年にとって「処刑機械」的な〈暴力〉を振るう存在は父であり、カフカ少年は〈暴力〉の被害者であった。しかし、睡眠から目覚めた時に、いつの間にか自身のシャツに赤い血が付いていた場面などが見受けられるため、カフカ少年自身も「処刑機械」的な〈暴力〉を振るう面があり、無自覚に他者を傷つける要素が自身にも存在することを知らずのだと考えられる。カフカ少年と「処刑機械」的な〈暴力〉の関係性について、松田氏は次のように指摘している（注13）。

「鑿でその一字一字を刻みこむ」父親はまさに『流刑地にて』の「処刑機械」そのものであり、彼はいみじくも彫刻家なのである。まさか実際に「鑿で刻みこむ」のではないが、田村少年にしてみればそれは「処刑機械」の《まぐわ》が囚人の皮膚と肉を刻むように、オイディプスの呪い

が意識に刻みこまれたのだろう。と同時にこの呪いは少年のころの奥底に住み、いつか少年を内側から食いつくすことになるかもしれない、彼を処刑してしまう装置でもあるのだ。「そしてそこには予言がある。それは装置として僕の中に埋めこまれている」（『海場のカフカ』上、17）というように。

松田氏は、カフカ少年の父である田村浩一によってカフカ少年にかけられた「呪い」が「処刑機械」によって刻まれることで、「いつか少年を内側から食いつく」し、「彼を処刑してしまう装置になる」と論じている。しかし、この「呪い」によって埋めこまれた「装置」は、カフカ少年と父の間だけで起こった特別な連鎖ではなく、全ての人間の中に潜んでいる「処刑機械」的な〈暴力〉の連鎖のだと推測する。

第三節でアンナ・ハーレント氏がアイヒマンの人物像を説明するにあたって、「実に多くの人々が彼に似ていたし、しかもその多くの者が倒錯してもいずサディストでもなく、恐ろしいほどノーマルだったし、今でもノーマルである」（注14）と述べていることから、この「処刑機械」に無自覚で振るってしまいう〈暴力〉は、アイヒマンの中だけでなく、全ての人間の内側に埋めこまれた「装置」だといえる。

このことから、「処刑機械」として描かれる人間はいつも決まった人物ではないということ、「処刑機械」的に無自覚に他者を傷つける要素は誰の中にも存在することが分かる。そのため、『流刑地にて』に登場する「処刑機械」とアイヒマンによるユダヤ人大量虐殺、そしてカフカ少年の父がカフカ少年のことを自身の作品のように扱って「呪い」の言葉を発する三点から、被害者にも加害者にもなりえるという〈暴力〉の中で人間が生きていることと、その無自覚で他者を傷つけてしまう〈暴力〉が蔓延していることが描かれていると考えられる。

人間が生きて他者と接している状態では〈暴力〉が発生してしまうことが分かったが、その〈暴力〉によって残る「痛み」について大島さんが語っている。その場面を示す。

「差別されるのがどういうことなのか、それがどれくらい深く人を傷つけるのか、それは差別された人間にしかわからない。痛みというのは個別的なもので、そのあとには個別的な傷口が残る。だから公平さや公正さを求めるという点では、僕だって誰にもひけをとらないと思う。ただね、僕がそれよりも更にうんざりさせられるのは、想像力を欠いた人々だ。T・S・エリオットの言う「うつろな人間たち」だ。その想像力の欠如した部分を、うつろな部分を、

無感覚な藁くずで埋めて塞いでいるくせに、自分ではそのことに気づかないで表を歩きまわっている人間だ。そしてその無感覚さを、空疎な言葉を並べて、他人に無理に押しつけようとする人間だ。つまり早い話、さっきの二人組のような人間のことだよ」
(第19章三一三頁)

この場面で大島さんは、女性団体に所属する二人組によって性的な差別を受ける。大島さんにとって、他者に配慮の無いこの二人組の言動は、〈暴力〉だと感じたと考えられる。大島さんの発言から、人間が〈暴力〉によって感じる「痛み」は、「個別的」なもので、その痛みに対して「個別的」な傷が残ることが分かる。そして、他者が傷ついていることに気がつくことができない「想像力を欠いた人々」によって、無自覚の〈暴力〉が引き起こされることが指摘できる。ここで他者を無自覚で傷つけてしまう、「想像力を欠いた人々」の例として、T・S・エリオットの『うつろな人々』という詩が引用されているが、これについては、別稿を用意し、詳しく論じることとする。

本作における「処刑機械」が象徴するものについて、小森氏は次のように述べている^(注15)。

なにより重要なことは、この『海辺のカフカ』で発生する事件そのものの構造が、この「処刑機械」と一致すると

いう点です。

この「処刑機械」で執行される処刑にあたっての「判決」は、その「判決」を受けた「当人」も、「自分が受けた判決を知らない」のです。(中略)どんな罪であっても、死刑なので、それから、「判決」の言葉を読み取ることの意味それ自体が無効化されてしまうのです。ここには、法であるところの言葉それ自体を無効化する暴力の問題が、あからさまに提示されているといつてよいでしょう。

『千夜一夜物語』とカフカの『流刑地にて』を先行するテキストとして位置づけてみると、『海辺のカフカ』という小説が、処刑小説であるという衝撃的な事実が浮かび上がってきます。『流刑地にて』の「処刑機械」は、罪人とされた人間の身体に、その罪状そのものを針で書き込む過程で死に至らしめるのですから、暴力ではない法という言葉で人間の罪を裁く在り方そのものが、死刑を容認している以上、直接的な暴力になる、という構造が暴かれているわけです。

小森氏は、『海辺のカフカ』という小説が、処刑小説である」と指摘しており、作中で「処刑」されている具体例として、佐伯さんが燃やした三冊のファイルや、ジョニー・ウォーカーに

よる猫殺しなどを挙げている。そして、「近代国家が成立して以後の、法と暴力という問題が、処刑小説としての『海辺のカフカ』における中核の部分に埋めこまれていることが明らかに」^(注)るのだと論じているが、『海辺のカフカ』における「処刑機械」とは、「処刑小説」の要素よりも、アイヒマンを例に語られているような「想像力を欠いた人々」によって引き起こされる無自覚的な〈暴力〉の象徴であるのではないだろうか。

六 おわりに

本論をまとめると以下のようになる。

アイヒマンによるユダヤ人大量虐殺は、『流刑地にて』における「処刑機械」に例えられている。アイヒマンにとって、他者を傷つける行為は「処刑機械」のように機械的な作業としておこなわれ、罪の意識は無い。

この「処刑機械」や、アイヒマンが無自覚で他者を傷つける行為が作中における〈暴力〉であると捉えられる。カフカ少年の父親もアイヒマンと同様に「処刑機械」的に、カフカ少年を傷つけているが、そのことに気がついていない。父親の発言はカフカ少年の心に「呪い」として刻まれ、カフカ少年は傷つい

ているため、〈暴力〉であると考えられる。しかし、このような無自覚に人を傷つける〈暴力〉は、必ずしも一方的なものではない。カフカ少年は、常にその〈暴力〉の被害者として位置するのではなく、カフカ少年自身も、加害者になる要素を潜在的に持っていると考えられる。カフカ少年の場合、父から受けた「呪い」によって「装置」が埋めこまれたことから、この無自覚で発生する〈暴力〉は無自覚のうちに連鎖していく可能性を秘めている。そのため、『海辺のカフカ』における〈暴力〉とは、視覚的に把握できる物理的な他者への攻撃ではなく、加害者は無自覚であるが、傷を受けた被害者だけが覚えているような精神的な苦痛を指しているといえる。つまり、『海辺のカフカ』に登場する『流刑地にて』の「処刑機械」やアイヒマンの話題とは、カフカ少年が認識している〈暴力〉の在り方を詳細に説明するために必要な要素だったのである。

そして、〈暴力〉とは、「個別的」な「痛み」を伴うもので、傷つけられた被害者にしか、その「痛み」を感じることはできない。つまり、この〈暴力〉は、他者の「痛み」を想像することができない人によって起こされるものであるという結論に至った。

注1 本文引用は『海辺のカフカ(上)』(新潮社 二〇〇二年九月)、『海辺のカフカ(下)』(新潮社 二〇〇二年九月)によるものとする。

2 小森陽一「村上春樹論―『海辺のカフカ』を精読する―」(平凡社 二〇〇六年五月)

3 遠藤伸治「村上春樹『海辺のカフカ』論―性と暴力をめぐる現代の神話」『国文学攷』第一九九号(二〇〇八年九月)

4 松田和夫「村上春樹試論―『海辺のカフカ』とフランツ・カフカ」『桜文論叢』第八〇巻(二〇一一年二月)

5 松田和夫「成長と自己破壊―村上春樹『海辺のカフカ』とF・カフカ『流刑地にて』」『桜文論叢』第八一卷(二〇一一年九月)

6 フランツ・カフカ『流刑地にて』(『カフカ短編集』岩波書店 一九八七年一月)

7 ヨッヘン・フォン・ラング『アイヒマン調書』イストラエル警察尋問録音記録』(岩波書店 二〇〇九年三月)

8 ハンナ・アーレント『エルサレムのアイヒマン―悪の陳腐さについての報告―新版』(みすず書房 二〇一七年八月)

9 『日本国語大辞典 第二版』第八卷(小学館 一九七二

年(二月)

10 注9に同じ

11 『日本国語大辞典 第二版』第七卷(小学館 一九七二年(二月))

12 注5に同じ

13 注5に同じ

14 注8に同じ

15 注2に同じ

16 注2に同じ

本論の内容は、平成三〇年五月二六日・二七日に台湾にて行われた第七回村上春樹国際シンポジウム、及び、平成三〇年六月一七日に本学にて行われたノートルダム清心女子大学日本語日本文学会での口頭発表に基づきます。発表に際し御教示を賜りました皆様に、厚く御礼申し上げます。

(おおか ありさ／本学大学院博士前期課程修了)

(キーワード) 想像力 処刑機械 痛み